

# Development of Dysdialysis Syndrome Risk Scale

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38934">http://hdl.handle.net/2297/38934</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 102722017

氏名 高橋 純子

論文審査員

主査(教授) 大桑 麻由美

副査(教授) 加藤 真由美

副査(教授) 稲垣 美智子

論文題名 「透析困難症リスクスケール」の作成

【論文内容の要旨】透析困難症は透析時間内に発生し、透析持続を困難にして透析本来の治療目的未達成の状態となり患者のQOLを脅かす重要な課題である。透析困難症防止対策には水分制限指導はあるものの、透析時間内の患者に発生することを予測的に管理するまでには至っていない。本論文はその予測スケールを作成し内的妥当性を検証した。

方法は、透析困難症発生のリスク項目を文献から抽出し、それらの項目ごとの推奨値を得点化した因子をもってリスクスケール原案とし、スケール作成手順に従い実施した。原案は、対象属性(5項目17因子)透析低血圧症関連項目(13項目36因子)不均衡症候群関連項目(5項目11因子)、透析機材不適合関連項目(2項目7因子)、口渴感(1項目2因子)、透析中に生じる自覚症状(8項目32因子)、透析に対する心因反応(5項目20因子)の合計39項目127因子となった。対象は7つの医療機関で透析を受けている患者の全数423名のうち同意が得られた298名であった。データは、対象の診療記録および患者への質問調査を実施した。本研究において原案項目・因子が実際の透析困難症に反映したかを評価する指標が必要なため、臨床的に実施されている透析困難症に至る処置介入を記録より抽出し点数化した処置介入スケールを作成した。この処置介入スケール得点は、透析前後の血圧と相関係数0.278の相関関係にあり、ROC曲線下面積0.729により内的妥当性が認められ「透析困難症リスクスケール」評価の指標として用いることが可能であることが確認できた。

「透析困難症リスクスケール」の項目抽出は、単変量解析、重回帰分析(ステップワイズ法)にて変数選択を実施後、臨床的知見を加味した2項目を加えて重回帰分析(強制投入法)を実施した。その結果、性別、収縮期血圧透析前後差、不整脈の有無、左室肥大の有無、透析速度、息切れ、6項目の因子抽出と因子の重みづけができた。さらに「透析困難症リスクスケール」得点と血圧低下の有無で比較検討した結果、得点が3点で感度が72.2%となり5点で100%が確認された。最終的には得点0の因子を加えて6項目12因子からなる合計10点の「透析困難症リスクスケール」を完成した。

【審査結果の要旨】透析時間内に起こる透析困難症は患者のQOLに大きく影響する重要課題である。本研究は経験的に実施していたリスク管理から予測管理へと関わる重要な知見を示した。また最終試験における質疑への対応も適切であった。以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士(保健学)の学位を授与するに値すると評価する。